書　　評

大友　篤著，『地域分析入門』

東洋経済新報社，1982年，261＋viiページ

地域調査・地域分析に関する書物として，私達は，『近世地方史研究入門』（岩波書店，1955年），『民俗調査ハンドブック』（吉川弘文館，1974年），『民俗研究ハンドブック』（吉川弘文館，1978年）をあげることができよう．これらの書物は，地域の歴史，民俗，社会事象を調査，分析するのに役立つことを目指している．

地域調査研究の先駆者である柳田国男氏は，歴史，民俗，社会調査研究についてどのような考えをもっていたのだろうか．橋川文三教授（日本政治思想史）によれば，柳田氏が「『調査，計画』と考えたものは，日本民衆の生活事実をその形態と心意について明らかにする」（橋川『近代日本政治思想の諸相』，未来社，1968年，p．24）ことを通じて民衆のための政治学，政策科学を確立することにあった．つまり，柳田氏の調査研究は，近代日本の政治や行政が「『ろくにこれぞという調査をとげ計画を立ててみたことがなかった』」（橋川『前掲書』，p．23）ことへの批判を基底にして展開されてきたといえよう．

ところで，今度刊行された大友教授の『地域分析入門』は，前述した書物であまり触れられていない人口，社会経済事象を分析するためのハンドブックという色彩が強い書物であるといえよう．本書は，著者が1978年6月から1981年10月まで雑誌『統計』に連載した「地域分析入門」を加筆改訂して一書にまとめたものである．

著者によれば，今日「地方の時代」ということがさけばれ，地域データの質的・量的増大は，著しいものがある．にもかかわらず，これらのデータを分析するのに必要な体系的な分析方法論が提示されていないのが現状である．そこで，著者は，この現状を打開し，地域政策の立案に役立つような一般的でかつ基礎的な方法を体系的に紹介することに，本書出版の意図があると述べている．

本書の内容を簡単に紹介すると，地域，地域分析の語義・概念について，各種の統計地域と地域データの所在，地域分析，地域特性，地域的関係，地域間の相互作用，地域構造等の静態的・構造的分析方法と分析例をまず紹介し，しかるのちに，地域変化の分析および地域予測の方法まで紹介している．したがって，本書は，地域政策の立案者にとって必携の書であるといえよう．

しかし，評者は，本書にしたがって一定の地域を調査，分析し，そのデータのみに依拠して地域政策を立案することにある種の危惧をいだかざるをえない．というのは，一定の地域には統計データ（人口，社会経済事象を主にした）だけで語りつくせない歴史と文化がある．にもかかわらず，地域統計データから解明できることは，データの性格上，現代的，表層的事象に限定されがちである．したがって，統計データに示された事象が一過性の表現形態なのか「本質的動向」（赤松要『経済政策論』青林書院新社，1956年，p．29）を示すものなのかを判断することは困難な場合が多いし，このような状況下で政策を立案することは，「単に外形的な変化，変遷をひきおこすにとどまり，真に日本民衆の幸福を達成することはありえない」（橋川『前掲書』，p．29）という柳田氏の思想をふみにじることにもなる．

したがって，本書は，冒頭で紹介したハンドブック等と併用することによって，その真価をいかんなく発揮するものと思われる．

いずれにせよ，本書の刊行によって地域調査研究と地域政策立案のための，たて糸（歴史的視点）とよこ糸（現在的視点）および思想的基盤（「柳田学」）の三大条件が整備されたことになる．この点に寄与したところに，本書刊行の最大の意義があるといえよう．

（清水　浩昭）